

バスケットボール競技におけるハーフコートオフENSE戦術に関する歴史研究

-Flex Offense に着目して-

コーチング科学研究領域

5020A049-7 津谷 俊一郎

研究指導教員:倉石 平 教授

I. 緒言

倉石(2005)は、「戦術・戦略はうまく使えばコーチの腕の見せどころ、最高の表現を出せるものだが、まちがえて策に溺れると、最悪の状態が出てくることにもなる。」と述べ、戦術は最大の武器になり、ゲームで勝利を収めるために戦術を準備しておくことは必要不可欠である。現在のバスケットボール競技の潮流は、2013 年頃から、「スモールボール」という 5 人全員がリングに正対するオフENSE戦術が主流になっている。このような潮流の中で、本研究で着目する”Flex Offense”(以下「Flex」と略す)は、現在でも使用されている戦術である。世界の潮流を踏まえた上でなぜ未だにこのオフENSE戦術が使用されているのか、誰が Flex を考案したのか明らかになっていない。またこのオフENSEが創られた頃はショットクロックがなかった。その背景がこのセットを生んだことと関係しているのか。本研究では、Flex の考案、変革、現在の変化・普及に至った経緯に着目し考察を交えながら、それらを明らかにすることを目的とした。

II. 研究方法

1. 研究対象

Flex の考案、実際に戦術として使用した全米大学体育協会に所属する男子バスケット

ボールチーム、コーチを対象とした。

2. 方法

3 つの観点を研究対象とした。

1 つ目、オフENSE戦術の考案者、考案目的と要因。2 つ目、変革せざるを得なかった要因。3 つ目、どのように変化・普及したのか、なぜ未だに使われ続けているのか。考案、変革、変化・普及に着目し文献調査を行った。

III. 結果・考察

第 1 章 Flex は、Pete Newell が考案した”Reverse Action”を元に Tom Davis と Carroll Williams が考案したオフENSE戦術である。Tom Davis が Gary Williams と考案した戦術が”Regular”である。Reverse Action と彼がプレイヤー時代に学んだオフENSE戦術を組み合わせたものだった。彼は多くのプレイヤーにチャンスを与えたかった。その方策として、大学でゲームのテンポアップを目的とした、ベースラインからのディフェンスと、誰でもどんなポジションに入る Flex を考案した。Carroll Williams がヘッドコーチをしていたチームは、若くて小柄なチームであった。自らのオフENSEで時間を費やし、相手にオフENSE時間を与えないことを目的として、“Rigid”を考案したと考える。Carroll Williams は、戦術理解度が上がったシーズン後半に Rigid に柔軟性をもたせ、

Flex と呼ばれるようになった。Rigid の場合は Lay-in しか放てなかった、Flex になるとどこからでもシュートが放つことができるようになった。

第 2 章 Flex の変革の要因。時間を費やす戦術が横行したことで、ゲームの面白さが半減した。そのため 45 秒ショットクロックが導入された。故に時間をかけてオフENSEを展開していた Flex がその効力を失ってしまったと考える。Flex は同じプレーを連続して行うため、相手に次のプレーが読まれやすい。80 年代にテクノロジーの進歩によって、情報伝達の技術が発達したことにより、スカウティング力が向上。その影響でディフェンス戦術方法発展したと考える。チーム、個人の特徴を見抜き、チームごとの戦術の変革をしたと考える。また 80 年代にペリメータープレイヤーが増えたため、Flex が多くの大学に使用されたのではないかと考える。

第 3 章 変化・普及。アシスタントコーチが、ヘッドコーチの指導理念、戦術を継承することによって、継承者の独自のフィロソフィーが加わり、戦術にも変化が起きる。Flex を用いて主要大会で成果を上げたことで多くのコーチによって Flex が見直され、普及につながったと考える。名将達でさえ、自分の戦術にオリジナルなものはないと認めている。未だに使われているのは、Lay-up や、シュート確率の高いシュートチャンスを創る動きが取り入れられているためであると考え。ディフェンスせざるを得なくなるため、そこに相手のすきを突くカウンターが加わることでより強力な戦術になると考える。

IV. 結論

Flex の考案、変革、普及・変化に至るまでの経緯を明らかにした。Pete Newell が考案

した Reverse Action を Tom Davis と Carroll Williams が別々の地区で考案した戦術が Flex である。Tom Davis は、多くのプレイヤーにプレーするチャンスを与えることを目的にアップテンポなスタイルから、すべてのポジションが交代可能な Flex(Regular)を Gary Williams と考案した。Carroll Williams は、ショットクロックがなかった NCAA において、ゲームを支配していたビクマンに対抗するために、シュートチャンスができて意図的にシュート放たず、戦術として自らのオフENSEで時間を費やすことを目的に Flex の原型の Rigid を考案した。Rigid は構造的な戦術であり、戦術理解度が上がったシーズンの後半に Rigid に柔軟性をもたせたことでこの戦術が Flex と呼ばれるようになった。2 人の考案目的が違うことから、フィロソフィーの違いが関係していると考えられる。ショットクロックがなく、ディレイやストールオフENSE戦術が横行したことで、1985 年に 45 秒ショットクロックが導入された。ボールをコントロールできる時間の制約ができたことで、意図的に時間を消費することを目的とした Flex の効力が失われてしまったと考える。同時に、スカウティング力の向上、プレイヤー構成などが、戦術全体の変革に関与していると考え。そして名将の影響を受けたコーチ達が、Flex に独自のオプションを加え、主要大会で成果を残したことがきっかけとなり、多くのコーチが Flex を見直すことになったと考える。そしてそれらのコーチが学び続けることで、変化と普及に繋がり、現在でも使用される戦術に変化したと考えられる。現在では、スライスカットや、Flex の一部を使用した戦術が多くのチームで使用されている。